

看護管理者の視点から

元 国立大学法人金沢大学附属病院 副病院長・看護部長
前 公益社団法人石川県看護協会 会長
小藤 幹恵

10年前となります平成27年度の実情ですが、身体抑制の実施のない部署数は、年度前半6割で、年度末3月には9割へ、ミトン使用のない部署は4割から8割へと増加しました。身体抑制件数は、年度後半に減少し、年度末の平成28年2月に、一般病棟・精神病棟でゼロとなりました。この経過を看護部長の立場から8つの視点から述べます。

1点目は、抑制について看護部門の目標に掲げたことです。平成26年度は「抑制・束縛・禁止を減少させ、選べること、したいことを増加・支える実践をする」を挙げ、翌27年度には「抑制という手段を用いることを激減させる」、3年目の28年度は「尊厳、認識、歩み」をキーワードにしました。目標管理における報告会には、“生き生きしている”、“わくわくする”、“素晴らしい！”、“今後の方向が明確”な取り組みを選んでいます。26年度は、減少させようという意識が出てきた段階、27年度前半は、意識はあるのですが「できそうにない」という雰囲気がありました。後半に向けてチャレンジへの壁を見出し、患者の身になって考えるというところに倫理的な思考を用いていきました。高度急性期の場での抑制の無い看護を、「高度」で「先進的」と考え、チャレンジの先に描きました。

2点目は、学習と共有です。知識を得る、経験から学び合う、苦労やピンチを語り合い分かち合う、そのような場を持っていきました。3点目は、最前線での看護現場の実際から学ぶことです。学びあえる教育的環境は重要です。その中から事例を紹介します。

4点目は、看護を支える仕組みの中に盲点があったことに気が付き、わかり次第見直ししていました。5点目は、ICUにおける取り組みが行われたことです。一般病棟ゼロから10か月後に、ICUでは抑制ゼロ実現しました。その後は2~4件程度となりましたが、ついにはゼロ継続につながっています。6点目は重症度・医療看護必要度における直接看護量が何割も増加に転じていることです。7点目は、看護記録への記載内容が、ケア向上・継続に頼りになるものに変化していることです。

8点目は、抑制ゼロとなった後の抑制発生と、そこからの学びです。これらは苦悩する経験でしたが、新しい種類の困難に気が付く貴重な学びとなり、よい対応ができるように緊張感のあるチャレンジは毎日続いており、抑制のない看護の持続というより、抑制を看護として考えることのない看護風土が醸成されています。組織の変化では、見守りという濃厚なケアの増加と活用、医師との心の通い合った協力、有害性への理解の拡がり、看護とチーム力による患者さんへの効果の実感、院内全体の看護師間の協力姿勢や自発的な部署間応援の協力申し出がみられるようになりました。患者さんの満面の笑顔に家族も看護師も皆喜び、看護のやりがいを深めていく空気を感じています。

この一連の取り組みの物語は決して特別なものではないと思います。それぞれの病院看護部門は、必要な課題に取り組み、その特別な物語があると思います。当院の物語でも、何百人の看護師たちが、日夜、病院の医療の質を支える重要な担い手として、患者の最も近くで、常に、それぞれの人に寄り添った看護にチャレンジ・奮闘しています。今日の時代、たった一人の看護師の気づきであったとしても、これを糸口にして、ますます臨床の場で丁寧に向き合っていくことが大切だと考えています。